

# デイサービスの正月行事

Clover Newsletter

クローバーだより  
2025年 2月号



↑「書初め展」見学の様子

正月遊び(福笑い)の様子 →



← 初詣の様子

デイサービスでは福知山市三和町の梅田春日神社へ初詣に出かけました。新年を迎え暖かい日のもと、皆さん一年の健康と安全を願っておられました。

また瑞穂小学校で行われた「書初め展」にも出かけ、今年は地域の皆さんの作品としてデイサービスでかかれた書も出展。展示された書に見入っておられました。

レクリエーションでは、正月遊びとして「福笑い」も楽しんでもらい、一年の始まりを肌で感じられた一月となりました。

## <ご一読ください>

荒牧敦子(当団体監事・前理事長)は、長年にわたって叔母の成年後見人を務めてきました。

叔母を見送り「認知症の人と家族の会」京都支部発行の会報にも掲載された記事を今月号と共に挟んでいます。

## NPO 法人クローバー・サービス

京都府船井郡京丹波町橋爪楡山 53

■TEL (0771)88-5014 / ■FAX (0771)88-5017

■e-mail: info@cloverservice.or.jp

■ホームページ http://www.cloverservice.or.jp

## クローバー・デイサービスセンター

京都府船井郡京丹波町橋爪楡山 41-1

■TEL & FAX (0771)88-0138

■e-mail: day@cloverservice.or.jp



facebook QR

# 映画・本・歴史のこと

## 〈第24回〉インドの映画と推理小説

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。  
写真はインド映画の撮影風景(1977年ボンベイにて筆者撮影)

### ラジエシ・カナ

巻頭の写真は、インドの大スター、ラジエシ・カナ。ジナト・アマンとの共演作『アシク・フン・バハルン・カーン』(一九七七)の撮影風景である。

ボンベイ(現ムンバイ)の安宿の相部屋でスイス人とすごしていた。文庫本にまでカビの生える八月の雨期。雨が降り出すと、隣室のイ

ラン人女性が出てきて、雨を眺めていた。乾燥した土地の人には、うっとりする風景なのだろう。

をまとい、男を警戒していたが、破れたズボンを縫おうとしたら、針と糸を貸してくれた。

ある日、イラン人の映画関係のブローカーがやって来た。外国人のエキストラを集めていると言う。貧乏旅行者たちは、ヒマと好奇心で、雨の中、捕虜のように幌付きトラックで、ロケ現場まで運ばれた。そ

れがラジエシ・カナの撮影現場だった。こちらは歌う主役の周りで、テーブルについているだけ。あらかじめ録音したふき替え歌手の歌に彼が口を合わせていく。ラジエシ・カナもすつかり年をとった。娘のトゥイクル・カナはプロデューサーとして、夫の大スター、アク・シャイクマールとともに、カナダとの合作など映画界で活躍している。

今でも、日本のインド食堂で、「ラジエシ・カナに会ったことがある」と言えば、厨房の料理人まで出てきて、インド映画の話で盛り上がる。

### アミタバ・バチャン

七〇年代の一番の人気スターはアミタバ・バチャンである。

題名は忘れたが、彼は撮

影中に瀕死の重傷を負った。その時、のちに首相となるラジブ・ガンジーは、ワシントンを訪問中だった。彼は急遽、日程を切り上げ、見舞うため帰国したほどである。

その作品のビデオをロンドンで見た。事故の瞬間、ストップモーションとなり、「ここで怪我をした」と、字幕が出た。

のちに彼も国会議員と

なった。よほど懲りたのか、すぐに辞めた。

七〇年代は、後半になっても、バングラデシュ独立に伴う難民が、カルカッタ(現コルカタ)の路上に溢れていた。難民孤児の男の子と親しくなった。「アミタバ・バチャンの映画に行くか」と誘うと、跳び上がった喜んだ。

アミタバは政治家を辞め、ビジネスで破産ののち、国民的クイズ番組の司会で再ブレイクした。

この辺りの事情から作られたのが、イギリス製インド映画『スラムドッグ\$ミリオネア』(二〇〇八)ダニー・ボイル監督である。

### アミール・カーン

二〇〇〇年代に入



シク教徒(=パンジャブ人)親子の食堂  
(デリーにて筆者撮影)

ると、同じ一九六五年生まれ

のアメリカ・カーン、サルマン・カーン、シャー・ルク・カーンの「三カーン」の時代に入る。

一九九一年、ラジブ・ガンジー首相が暗殺され、ラオ政権が誕生、親ソ連の社会主義的経済を自由化させた。現在も進行中のグローバリズム国家への転換点となった。

二〇一四年、国民会議派から政権奪取したインド人民党のモディ現首相は、状況をさらに加速させる。日本など外国資本が、銀蠅のようにたかる、大気汚染と社会問題山積みの国に変えてしまった。

こうした条件下で、アミール・カーンは、政治的、社会的テーマを、笑いと涙の物語に変換し、大ヒッ

ト作を連発している。

### 『キーン・キーン・キーン』(二〇〇九)

原題は「三人のバカ」。

タイトルからして、すでに深刻さを脱力させている。

超エリート工科大学に入学した三人の友情とその数年後をつなぐ歌あり、恋あり、旅行ありの物語。アミール・カーンは、深刻化する競争社会の問題を、あくまでも娯楽映画として描いていく。



カルカッタの小学校の教室(筆者撮影)

ここでは、親の過剰な期待に押しつぶされそうにな

り、自殺を試みる(実際、インドの若者の自殺率は世界一になってしまった)学生や、点数がすべての学長、学生が登場する。こうした学歴偏重を映画は軽やかにおちよくりながら、深く批判していく。映画的快乐に満ちた大ヒット作である。

### 『PK』(二〇一四)

テーマは宗教。宇宙船を操縦するペンダントを失くした宇宙人PKが、「神にたのめば願いはかなう」と言われ、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教の人たちにてあっていく。ところが、各々の神様が違うので、PKは面食らう。「一体、神とはいかなるものか」と観客とともに

思索を深めていく構造になっている。

アミール・カーンの、俳優として、プロデューサーとしての陽性な才能が全開。これも大ヒット作品である。

### 『花嫁はごいへ』(二〇一四)

彼のプロデュース作品。別れた二番目の妻、キラン・ラオが監督している。

まだ十代、子供同然のプールは夫に連れられて、彼の村まで汽車で向かっていった。車中で偶然、夫は顔をヴェールでおおった同じ花嫁衣裳のジャヤとプールを取り違えてしまう。いざ村の家族の所に着いて、大騒ぎとなる。

助けられ、夫の迎えを待つ。

ジャヤは自分の夫の顔も知らない。大学で農業の勉強をしたいにもかかわらず、奴隷のような結婚を強いられていた。

捜索を依頼した警察署長は、ワイロばかり取っているが、ジャヤの現れた夫の悪行はきつちりとさばく。憎めないキャラクターである。ジャヤを仕方なく滞在させる家族の面々への監督

の暖かい視線も心地よい。男に自由を奪われる女性たちの、また家族のありようを、経済成長で勢いづく二〇〇一年に時間設定し、私たちは社会の変化に対応できるのかと、アミール・カーンは問いかける。鉄道や駅が物語の重要な舞台なのも、この作品の魅力である。へこの項、つづく

## お知らせ (訪問介護記録電子化について)

訪問介護及び、障害者居宅訪問サービスを利用されている利用者の方へのお知らせです。

昨今の社会情勢に倣い、クローバー・サービスではペーパーレス化、業務の効率化を進めており、訪問介護事業において「ヘルパー活動記録簿」の電子化を今年4月から開始することになりました。それに向けシステム移行の準備を進めているところです。詳しくはまた書面及び、訪問時にご説明させていただく事になりますが、利用者におきましては、どうぞご理解の程お願いいたします。

## 〈賛助会員〉

(有)あさひ堂  
 (株)一谷住宅  
 イン・ザ・ルーム亀岡店  
 上段税理士事務所  
 (株)高木設備  
 たにやま鍼灸整骨院  
 田端輪業  
 (有)土佐寿司  
 (有)永田損害保険事務所  
 (有)西村テレビ  
 ノエピア京都西都販売会社  
 三木歯科医院  
 みづほ電工  
 理容ちどり (五十音順)

## 職員紹介



うえはら まや  
上原 茉耶

普段は病院で看護師をしています  
 が、人と接することが好きでデイサ  
 ービスも経験したいと思い、1月よ  
 りお世話になっています。週に1回  
 程度しか勤務できず、わからないこ  
 ともたくさんありますがよろしくお  
 願います。

## 〈職員募集中〉

ブランクがあっても大丈夫  
 子育て中の方も活躍中！  
 働きやすい職場です  
 まずはお電話を！

【お問い合わせ】

0771-88-5014 まで

## 編集後記

冬になれば思い出すのが  
 祖母との思い出です。8年前  
 の大雪の日が祖母との別れ  
 でした。昔からおばあちゃん  
 子で、よく祖母の内職部屋  
 に入り浸っていました。ガガ  
 ガガッと聞こえるミシンの  
 音、古いラジカセから聞こえ  
 るラジオの音、石油ストーブ  
 に据えられたヤカンの湯が  
 沸く音。あの風景は今でも  
 鮮明です。▼散らばったま  
 ち針を色ごとに集めては並  
 べて刺したり、洗濯バサミ  
 と、ミシンの縫い糸の芯で工  
 作をしたり、時には針に糸  
 を通して祖母の仕事を手伝  
 ったり、今から思えば退屈  
 もせず色々遊んでいたんだ  
 なあとあります。▼その中で  
 も冬場の石油ストーブの思  
 い出が一番鮮明です。内職  
 で出た綿毛をつかんで、石  
 油ストーブから立ち上がる  
 上昇気流にのせ、ふわふわ  
 昇っていく綿毛を見るのがと  
 ても好きでした。昇っていっ  
 た綿毛が祖母の頭の上や、  
 手元に落ちないか、いたずら  
 さい。

心で何度もチャレンジしまし  
 た。結局一度も成功しない  
 まま終わりました。▼今で  
 はエアコンや、石油ファンヒ  
 ーターなど直接火が見えない  
 安全なものが普及し、昔な  
 がらの石油ストーブはあま  
 り見かけなくなりました。  
 うちにももうその姿はあり  
 ませんが、石油ストーブにヤ  
 カンを据えたり、時にはその  
 上で、餅を焼いたり、ミカン  
 を焼いたり、年末には黒豆  
 を炊くのに大鍋を据えたり  
 と昭和の懐かしい姿です。学  
 校にあった大きなストーブ  
 で牛乳瓶を温めて飲んだの  
 も懐かしいです。▼KBS京  
 都や、Amazonプライムビデ  
 オなどの動画配信サービス  
 で放送している「おいしい給  
 食(市原隼人主演)」という  
 ドرامアはご存じでしょうか？  
 昭和五十年代、平成初期の  
 給食風景を面白おかしく表  
 現したドラマで映画化もさ  
 れています。昭和ノスタルジ  
 ーを感じたい方、興味ござい  
 ましたら一度見てみてくだ  
 さい。

へ編集子へ

# 叔母を見送つて

荒牧敦子

クローバー・サービス監事（前理事長）

認知症の人と家族の会京都支部前代表

## 叔母が亡くなり「実家じまい」

令和六年九月十四日、かねてから私が成年後見人を務めていた知的障害を持つ叔母が亡くなり四十九日の法要を済ませました。お骨を菩提寺の供養塔に納めて、実家の仏壇とともに永代供養をお願いして、すべてが終わりました。

彼女が私の実家の最後の人でした。江戸中期からつづいたと思われる丹波の国の百姓であり、質屋も営んでいたようです。京都と丹後への街道筋にあつて、様々な人々が行き交つたであろう山国の一介の百姓に過ぎないとはいえ、私の手で終わらせるのは感慨深いものがあります。

昔は資産家だったと聞かされても、今の私には何の恩恵もなく、残された山と田ん

ぼの維持管理に年金をつぎ込む老後、日本の田舎には私のような老人があふれているのだと思います。古屋敷が残されて、維持管理にはなかなかの労力が必要ですが、都会のマンション暮らしが長かった私にとって、不便でもゆつたりとした日常も捨てがたいものです。

私の父は婿養子で、亡くなった叔母は母方でした。二代続いた女系の長女の私は、何とか自分の実家の継承問題に決着をつけるという責務を負っていました。まあ、そうはいつても、私にとって「実家をどうしても残さなければ」という思いがあるわけでもなく、生きている間に決着を付けなければならぬ難しい宿題でした。

## 成年後見人だった私

昭和三年生まれの叔母は、知的障害と難聴が重なり、一緒に暮らした時期は子供の頃だけなので、あまり記憶にないのですが、その頃は障害をもつ人に対しては強い偏見と差別があり、「家」の重荷であったことは想像に難くありません。

本人の意思というよりは他にすべがなく、後妻として嫁がされたようです。その後、二人の娘をもうけましたが、夫が交通事故で亡くなり、我が家に出戻りとなったようです。

その間のいきさつは知らされることもなく、私は両親の介護のために実家に帰って初めて叔母が「知的障害者更生施設」に入所していることを聞かされました。

当時、父が認知症、母が寝たきりで動けなくなっていたので、施設での保証人として私が関わることになりました。そのころ丁度「成年後見制度」が言われるようになり、制度に則って私が成年後見人になり、関わっていくことにしました。

## 連絡途絶えていた相続人

叔母の長女とは過去に二、三回会ったことがありました。次女は、二歳の頃に他家の養女になり、その存在を聞いているだけでした。叔母（被後見人）の死亡を成年後見センターに連絡したとき、同時に「相続人」を届けるようにとのことでしたが、さて、ど

うしたものか…。

叔母が亡くなったのは令和六年七月二十七日、あまりに暑い日々がつづくので遺体を長く置いてはおけず、菩提寺との連絡がとれないことも重なり、二十八日には私と息子の二人だけで密葬を済ませ、お骨を持ち帰ったところでした。ようやく住職と連絡がとれ、八月一日に菩提寺で葬儀を執り行うことになりました。

相続については苦労しましたが、思いついて三十年も前の父の電話帳を引っ張り出し、うろ覚えの二人の名前を探して見当をつけ、思い切って電話を試みたところ、見事にヒットして、いきさつを伝えることができました。

### 従妹とともに施設へお礼に

葬儀の当日、ほぼ初対面の従妹達に出会いました。私はすでに八十三歳、従妹達も六十歳台になっていましたが、何だか以前から交流していたかのように打ち解け、違和感がないのが不思議な感覚でした。

成年後見の報告書と預金通帳を見せて、

ほぼ四十年間お世話になった障害者更生施設にお礼ができていないこと、同行して謝意を伝えてほしいことを話しました。

高齢者施設に移行するとき、障害者施設にはせめて叔母の貯えから少しの寄付をしたいと成年後見センターに申し出ましたが、「相続人から異議が出るかもしれないので許可できない」と断られていました。そのことを二人に話すと、ぜひお礼に伺いたいということ、一緒に施設を訪問し、二人の名前で些少の寄付金を渡すことができました。

### 「産んでもらっただけでよかった」

二人には叔母が元気な間に連絡ができず申し訳なかったことを謝り、障害を持つ叔母を本人の障害者年金のみで最期のときまでしっかりと見つけ、残りを少しでも従妹達に引き継ぎたかったことを話しました。

葬儀と永代供養の費用などを支払った残りを、少しだけでも受け取れるように家庭裁判所に二カ月以内に報告すること

を伝えるとき、従妹が「私たちは産んでもらっただけでよかった」と言ってくれました。これまでの努力が報われたと思える言葉でした。

### 後見人として「納得」

成年後見制度に取り組んだ目的がここにあったと実感でき、ようやく心に描いていた人生の到達点に達したと納得できました。成年後見制度に則って叔母のお世話をできたことで私の公正な取り組みを知ってもらえたと思います。

それにしても、後見センターへの最後の報告書の作成は面倒で、しよぼつく目を見開きながらの苦行ですが頑張ります。

「了」

本稿は、「認知症の人と家族の会」京都支部発行の『ぼくればぐれ』532号(2024年11月25日発行)に掲載されたものを許可を得て転載したものです。

許可いただいた同会に感謝します。本紙掲載に当たって小見出しなど一部を改変しています。